

氏名	北島 洋美 (キタジマ ヒロミ)
本籍	神奈川県
学位の種類	博士(老年学)
学位の番号	博甲第 100 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	高齢期の性的マイノリティの主観的な生活課題と施設サービス提供者の対応 – 同性愛・両性愛者に着目して–

論文審査委員	(主査)	桜美林大学教授	中 谷 陽 明
	(副査)	桜美林大学教授	長 田 久 雄
		桜美林大学教授	杉 澤 秀 博
		神奈川県立保健福祉大学名誉教授	谷 口 政 隆

## 論文審査報告書

### 論文目次

I. 研究の背景	1
1. 性的マイノリティとは	
2. 性的マイノリティの割合と人々の受容	
3. 高齢期の性的マイノリティに関する研究の到達点と課題	
II. 研究目的	1

Ⅲ. 第一研究	2
1. 目的	
2. 研究の方法	
3. 結果	
4. 考察	
Ⅳ. 第二研究	3
1. 目的	
2. 研究の方法	
3. 結果	
4. 考察	
5. 限界と課題	
Ⅴ. 総合考察	5
1. 当事者が選択できる施設	
2. 多様な利用者に対応できるスタッフ	
3. 地域での課題	
4. 今後の課題	
参考文献	7

## 論文要旨

本論文の目的は、高齢期の性的マイノリティが経験している生活上の課題を明らかにするとともに、高齢者を支援するサービスの提供者が持つ性的マイノリティに対する態度を明らかにしようとするものである。はじめに、LGBTQ と称される性的マイノリティについて、近年そのことについて秘匿するだけでなく、社会的、経済的に不利益を経験しているグループとして、社会がその包摂に尽力すべきだという状況が概観された。加えて、性的マイノリティが高齢期を迎えた際には、健康、孤立や孤独、貧困、差別・偏見の経験といったリスクが増幅される可能性を指摘した。それらのことを踏まえて、高齢期の性的マイノリティにかんする研究状況を概観し、国内外の研究の歴史が非常に浅いこと、とくに日本において、性的マイノリティの高齢者に関する研究が数少なく、そのおかれている状況も明確にな

っていないことを明らかにした。したがって本研究は、2つの研究を実施することによって、高齢期の性的マイノリティについての研究的知見を蓄積することへの貢献を目指している。また本論文では、調査実施上の制約等から、性的マイノリティのなかで、同性愛者と両性愛者に限定して調査を実施した。

第一研究は、性的マイノリティ高齢者の主観的な生活上の課題や不安の構造およびその背景を明らかにする目的で実施した。調査方法は、22名の性的マイノリティ高齢者への半構造化面接を行った。得られたインタビューデータを質的に分析し、12のサブカテゴリーと4つのカテゴリー、およびストーリーラインを生成した。「否定的な価値観の影響」カテゴリーには、「否定的な価値観を知る」「性的指向を隠す」「自分を抑え込むつらさ」「性的指向は問題にならない」のサブカテゴリーが含まれた。「頼らない／頼りにくい状況」カテゴリーには、「頼らない生活」「希薄な支え」「具体的に考えられていない対応」のサブカテゴリーが含まれた。「心配なく過ごせる場所を求める」カテゴリーには、「隠さない環境」「安心なフォーマルサービス」のサブカテゴリーが含まれた。「自助・互助で備える」カテゴリーには、「肯定できる暮らし」「老・死に向けての準備」「人とのつながり」のサブカテゴリーが含まれた。4つのカテゴリーのつながりは次のとおりであった。当事者は現在「頼らない／頼りにくい状況」にあり、それを生んでいたのは「否定的な価値観の影響」であった。これから先については、自分自身で行う対応である「自助・互助で備える」と、外に向かつての要望である「心配なく過ごせる場所を求める」とがあった。

第二研究では、高齢期には介護施設への入所の可能性が高くなることから、介護施設のスタッフを対象として質問紙調査を実施した。以下の2つの問いを設定し、その関連要因の探索も行った。①スタッフは性的マイノリティ入居者の希望を尊重した対応を行うか、②スタッフが選択する対応にどのような要因が影響を与えているか。これらの問いのために、ゲイ、レズビアン、バイセクシャルの3つのヴィネット（架空の事例）を提示して回答を求めた。調査対象者は、東京都23区内の特別養護老人ホーム26施設のスタッフであった。質問紙配布数は994通、回収数は607通（回収率61%）であった。分析の結果、スタッフは批判的な対応を回避する傾向にあり、スタッフが実施する対応（当事者へのスタッフの対応）のほうが、当事者はそうしてもらいたいだろうという推測（当事者の希望に対するスタッフの認知）を上回っていた。さらに重回帰分析の結果、「常勤雇用」と「当事者の希望に対するスタッフの認知」がスタッフの「積極的な対応」を有意に促していた。

総合考察としては、まず当事者は性的指向が問題とされない環境を求めていることが導き出された。ただし当事者が求める施設は千差万別であるので、施設・サービスを当事者が安心して暮らせる場所として作り、それが当事者に伝わるように働きかけることが肝要であることを論じた。次に、介護するスタッフは、自分がネガティブな態度や考えも持っているかどうかはあまり意識されていない可能性があるため、セクシュアリティ以外の事項も包含した Cultural Competency のトレーニングが有用であることが示唆された。最後に調査

結果からは、介護が必要になった際には、入所サービスの選択が第一であった。しかしながら今後は地域包括ケアシステムの構築が政策的な課題となっていることから、地域においての生活の継続ができるよう、法整備等を含めて対策が必要であることが示された。

## 論文審査要旨

性的マイノリティの高齢期に焦点をあてた研究は、社会的にも必要とされているにもかかわらず、国内外ともに未だ数少ないことから、非常に意義のある研究である。さらに、研究対象としてはアクセスが困難な性的マイノリティから直接聞き取りを行いデータを入手できていることも、本論文が提示している知見の価値を大いに高めている。また研究手法は、質的研究と量的研究を組み合わせたもので、知見を豊かなものにしようとする努力も認められる。とくに性的マイノリティ当事者へのインタビューでは、様々な側面で差別・偏見の経験をもつ当事者と信頼関係を構築しつつ、個々のライフコースに沿った生活上の困難やそれらに対しての心情を根気よく丁寧に聞きとっていく作業に、大きな価値を見出すことができる。そしてそれらのデータを質的に内容分析を行い、いくつかのカテゴリーや概念を生成していく過程は、博士学位請求論文の研究手法として妥当なものである。また施設介護スタッフに対して実施した質問紙調査およびその分析手法も、研究手法としては標準的なものである。最後に結論として指摘した3つの課題については、概ね妥当なものであり今後の研究にも有用な指摘であると考えられる。

課題としては、性的マイノリティの高齢期についての先行研究が少ないことは致し方がないが、性的マイノリティあるいは社会におけるマイノリティに関する研究はかなり蓄積があると思われるので、それらの文献へのレビューが不足していることが指摘され、そのため考察の新規性がうまく示されていないことがあげられた。

## 口頭審査要旨

研究の意義および研究目的について、改めて口頭により確認を求め、論文の趣旨と同様の回答を得た。さらに研究手法の詳細について、いくつかの質問・指摘を行った。たとえば、聞き取りによって個々のライフストーリーに沿ったデータが入手されているが、内容分析の段階では、それらのストーリーが断片化されすぎて、事例としてのダイナミズムが失われたのではないかと指摘した。これに対し、断片化については認識してはいるが、対象者との約束により何より匿名性を重視したことから、断片化せざるを得なかった事情が説明された。さらに、論文の査読において指摘されたもう少し文献レビューの範囲を広げることにつ

いても、具体的な説明を求めた。たとえば、論文では日本と欧米での性的マイノリティの相違についての記述、あるいはそれらを前提とした考察が散見されるが、日本と欧米のそもそもの文化の相違や社会的制度の差異についての文献レビューの不足の説明を求めた。回答としては、今回の論文は性的マイノリティの高齢期についての研究に焦点をおくことを主眼にしたもので、より広い周辺的分野への文献レビューは含めないことにしたというものであった。

以上のように、口頭審査における質疑応答は、概ね満足の行くものであった。論文については、さらなる改良の余地は残されているものの、その点は今後の研究課題として再認識してもらったこととした。以上から結論として、本論文が博士学位請求論文として合格であることを、主査・副査の全員の合意によって確認した。